

『うつほ物語』における昭君説話に関する一考察

——引用のあり方とその独創性について——

趙 小菁

本発表は、『うつほ物語』「内侍のかみ」の巻における昭君説話の引用を例に、その引用のあり方・方法およびそのような引用が成立する原因・意義を分析することを通して、『うつほ物語』における漢文学受容の方法を考察する。

「内侍のかみ」の巻が、従来幻想的・非日常的な一卷と言われており、その物語的空間は、蓬萊山・楊貴妃・項羽の故事など大量な中国故事の引用によって構築された幻想的な空間とも言えよう。その中で、俊蔭の娘が琴を弾くという盛大な場面では、昭君説話が琴曲の解として引用される。その引用は昭君説話の故事をそのまま語るのではなく、内容的に変動が見られ、なにより、昭君の宮廷における身分については当時の中国ではありえない飛躍が見られる。先行する昭君説話群を受容しながら、「内侍のかみ」の巻における昭君説話は物語内容に沿って変容した。そこでは一介の女官である昭君が帝の最愛の後に昇格するという独創的な内容が、後の日本古典文学に深く影響し、昭君説話もこれによって常に楊貴妃説話と並列されるように位置づけられるようになる。一方、中国で昭君説話がこのように変容したのは、二百年も後である。

具体的には、中国と日本古典文学における昭君説話の変遷過程を整理し、日本に渡来したのであろう昭君説話の絵画作品または後世の絵巻・絵本をも視野に入れつつ、「内侍のかみ」における昭君説話をそれらと対照しながら、前述のような身分上の「昇格」をもたらす原因について考察する。その上で、『うつほ物語』のこの引用が後の作品に与えた影響を検討し、中国における後世の昭君説話、特に元代の戯曲「漢宮秋」との関連性をめぐって、『うつほ物語』の昭君説話と「漢宮秋」の形成において参照可能な共通文献を提示し、前者の独創性の意義を考えたい。

A Study of the Episode of Zhaojun in *Utsuho monogatari*: Focusing on the Method of Quotation and its Originality

Zhao Xiaojing

This presentation will focus on the episode of Zhaojun which is quoted in the “Naishi-no-kami” chapter of *Utsuho Monogatari*. By analyzing the way the episode is quoted as well as the motivation and significance of its quotation, this presentation aims to consider the nature of *Utsuho monogatari*’s reception of Chinese literature.

The “Naishi-no-kami” chapter is considered to be a chapter full of fantasy and extraordinariness. It is made up of various episodes quoted from traditional Chinese literature, such as Mount Penglai, Yang Guifei, Xiang Yu and so on, which make it exotic and fantastic. Among these, in the scene where Toshikage’s daughter plays the Kin (*Guqin*), the episode of Zhaojun is quoted in commentary on the music. However, instead of using the episode as it was, the contents as given in the quotation have been revised. A leap has been made in the status of Zhaojun at court, one which would have been impossible in the China of the time. While being an example of the Zhaojun episode’s reception, the quotation transforms it in accordance with the *monogatari* content. In particular, the originality of Zhaojun, a lady-in-waiting, being promoted to be the emperor's beloved, had a profound effect on later Japanese classical literature, with the result that the episode of Zhaojun came to be cited in parallel with the episode of Yang Guifei. In China itself, however, the episode of Zhaojun would change in this way only 200 years later,

This presentation analyzes the transformation process of the episode of Zhaojun in both Chinese and Japanese classical literature, and also takes into consideration paintings about Zhaojun that may have been introduced to Japan, as well as later picture scrolls (*emaki*) and Nara picture books (*Nara ehon*). By comparing this quotation of the Zhaojun episode in the “Naishi-no-kami” chapter with these others, the causes of the above-mentioned “promotion” of her status will be considered.

In addition, this presentation will examine the influence of this quotation as found in *Utsuho monogatari* on later works, and consider the relevance of the episode of Zhaojun in China, especially the Qu (Qu poem) “Autumn in the Han Palace.” I would like to think about a possibly-referenced common text for both *Utsuho monogatari*’s version of the Zhaojun episode and “Autumn in the Han Palace,” and to consider the significance of the former’s originality.

『うつほ物語』における昭君説話に関する一考察

——引用のあり方とその独創性について——

趙 小菁

はじめに

「内侍のかみ」の巻が、従来幻想的・非日常的な一卷と言われており、その空間の幻想性はある程度大量な中国故事の引用によって構築されているとも言えよう。本発表はその中の王昭君故事の引用に注目し、『うつほ物語』における漢文学受容の有り様を考察する。

相撲の宴において、俊蔭の娘の琴曲に対して、朱雀帝が昭君説話を曲の解に引用した。王昭君の名は出されていないものの、故事の筋から、昭君の故事であることはまず確認できるが、中国に伝わる王昭君故事と数多くの相違が見られる(注1)。紙面の制限によって、ここでは最も著しいと思われる変容だけを取り上げる。

…そのうちに、天皇思ふこと盛なりければ、その身の愛を頼みて、ここぼくの国母、
(中略) おのが徳のあるを頼みて贈らざりければ…

すなわち、王昭君を帝最愛の「后」として扱っていることである。これは、それまでの中国の昭君故事には見えない独創的な内容である。本発表はこの『うつほ物語』の変容を中心に、中国の昭君説話群を参照しながら、「内侍のかみ」における引用の独創性とその理由・引用方法と影響を考える。

一、中国の昭君説話の流れ

王昭君に関する最初の史的記載は、信憑性が高いと言われる『漢書』に見られる(注2)。「賜單于待詔掖庭王嬙為閼氏」(巻九・元帝第九)と、昭君が和親する経過を簡潔に記録している。「待詔掖庭」は女性が内裏に入り、帝に召見される前に住む場所である(注3)ので、昭君はまだ帝の目にかかっていない妃の予備役であることがわかる。

東晋孔衍が編纂したと言われる『琴操』(注4)において、昭君説話は琴曲の題の解説として用いられ、琴と関わりを持つようになる。『琴操』の王昭君説話は「怨曠思惟歌」という四言詩歌にあわせ、創作性が強く、史実から説話へ転化する性格を窺わせる。

琴曲「昭君怨」をもとに創作された作品は晋の石崇の「王昭君辞並序」である。この序が「昔公主嫁烏孫、令琵琶馬上作樂」と烏孫公主説話と関連付けて以来、後の昭君説話を取り扱う創作において琵琶は重要な要素となり、琴の存在は段々薄くなっていく。詩歌は無論、絵画作品の世界でも、現存する昭君故事を初めて主題とする『明妃出塞図』(注5)からはすでに琵琶の存在が確認できる。

初めて昭君説話において絵師に賄賂の筋が見られるのは、漢晋以来の伝説や野史をまとめた葛洪の『西京雜記』である。それにおいて、昭君が和親に選ばれた理由は後宮の女性の失意から朝廷官員の清廉潔白へ転換している。その点に作者の姿勢が作用してゐるであろうが、それにおいても昭君は決して妃として描かれることはない。

唐に入ると、昭君を主題とした詩歌および散文が盛んに作られる。詩歌のほうでは、先行する昭君説話をほぼそのまま受け入れている上で、昭君のことを「明妃」という呼ぶこ

とが多くなっている。しかし、「明妃」は南北朝時代の江淹の「恨賦」に初めて見られる特殊呼称であり、実際の妃という意味で使われたことがない。散文のほうでは、前代の説話群を受け継ぐ形で唐伝奇小説が数多く創作されたが、多くは政治性格の強い翻案散文であり、本稿で扱う昭君説話とは関係が薄いかと判断した。その中、敦煌出土の「王昭君変文」があり、現存するその上巻の首部が欠けており、内容を正確に把握するのは難しい。これについては、また後述する。

以上で中国の昭君説話を大まかに整理してみたが、昭君を帝の最愛の妃に昇格させた現存する先行文献は、中国では存在しないと言えよう。

二、「内侍のかみ」および日本古典における昭君説話

昭君説話が初めて日本古典に見られたのは『懷風藻』『文華秀麗集』など漢詩集であり、漢詩における昭君説話はほぼ中国のそれを受け継いでいるように見える。そして『うつほ物語』が、その説話を物語世界に引用したのである。

では、「内侍のかみ」の昭君説話における身分の昇格はなぜ出現したのであろう。確かに、後宮に入った女性は名義上すべて帝の配偶者であるという認識は間違っていない。しかし、「天皇思ふこと盛りな」る后と面会さえされていない女性とは階級および序列における飛躍的な差があると考えられる。さらに注目したいのは、その引用の後に、「楊貴妃が、七月七日長生殿にて聞こえ契りけらば」と朱雀帝が俊蔭の娘と再会の約束をしており、「国譲下」の巻においても、兼雅が「王昭君を胡の国へ遣りたまへる、楊貴妃を殺させたまへる帝」と対句的に両者を捉えている。すなわち、『うつほ物語』において、昭君説話は楊貴妃説話と対等に位置付けられているのである。

「内侍のかみ」における昭君が帝の後になった原因は、「げにさる天皇の正妃として、一の後としてありけむに、さる武士の手に入りけむ心地いかなりけむ」という朱雀帝の言葉に込められていると思われる。「内侍のかみ」という「帝と貴婦人の恋を自然なものとする背景」(注6)において、朱雀帝が俊蔭の娘に長年の恋と妻にできない遺憾を伝えている。昭君説話の引用において朱雀帝が自らを唐土の帝に、俊蔭の娘を昭君に、兼雅を胡の人に喩えているが、昭君の正妃たる立場は、まさに朱雀帝が自らの恋慕と希望を表すための設定なのであろう。

無論、后としての位置づけは、「明妃」との呼称の誤読である可能性もなくはない。しかし、後に朱雀帝が俊蔭の娘を「私の后」と称する筋を考えると、この説話が朱雀帝によって語られることは、その後である設定を彼自身の意思と理解したい。

更に言うと、俊蔭の娘への恋慕は、実際は「かのなん風のいへの族」への重視であり、皇室が秘琴への執着である。仲忠の存在によって俊蔭の娘は朱雀帝の妃になれないが、秘琴の一族の女性が天皇の配偶者に等しい地位にあるはずであるので、この幻想的・非日常的の巻で、天皇が述べた異国の昔話において、天皇の俊蔭の娘が仮初めの夫婦関係を結びたのである。言い換えれば、この変容した説話の引用によって、俊蔭の娘が天皇の妻にも母にもなれない物語構造上の遺憾は、虚構の空間において円満にするという創作者の意図が読み取れると思われる。

『うつほ物語』以降、昭君説話は物語やほかの散文にも登場する。例えば『源氏物語』では、須磨に滞在している時、源氏が「昔胡の国に遣はしけむ女を思しやりて(中略)、

この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむことなど」(須磨)を思い、琴を弾きながら紫の上との別離を悲しむ。昭君を「思ひきこゆる人」と認識しているだけでなく、琵琶ではなく琴と関わっているところも「内侍のかみ」と一致している。

その後、昭君説話を故事として引用しているのが『浜松中納言物語』、『大鏡』、『曾我物語』、『太平記』など、故事の内容をそのまま講述するのが『俊頼髓脳』、『今昔物語集』、『唐物語』などがある。中国式の昭君説話に還元する傾向を見せている一方、平安時代成立とされる作品においては昭君がだいたい楊貴妃、または「李夫人」、「上陽人」(『浜松中納言物語』)と並べてられており、「漢元帝ノ后王照君」(『今昔物語集』)のように昭君を后と呼称する作品もある。それらを通して、日本古典における昭君説話の継承の中に「内侍のかみ」の存在が大きいと言わざるを得ないのであろう。

三、「王昭君変文」と「漢宮秋」

中国の昭君説話における王昭君の身分はいつ変化したのであろう。先述した唐の時代の昭君説話は先行のそれとあまり変わりが無いが、敦煌変文「王昭君変文」は前半を散逸されているので、かえって想像の余地を残している。

「王昭君変文」において、昭君が胡の国に着くと、「慈母只今何在？君王不見追來」と嘆く。その嘆きの背後には、国と家族から離れる寂しさ以外、帝が追いかけて来ない悲しさも混ざっていると思われる。その嘆きによってやがて昭君が病死してしまい、臨終の際には「孤鸞視影猶□□、龍劍非人常憶雌。妾死若留故地葬、臨時□(請)報漢王知」と單于に言い残した。「孤鸞」は、配偶者を失った女性の喩えであるが、「龍劍」はそれと対応する男性を意味する。夫は常に失った妻を思うので、私の死を漢の王にお知らせください、と理解すると、「龍劍」は單于ではなく漢の王を指し、昭君は死に至っても漢王の妻である自覚をしていることになる。

無論、実際に「王昭君変文」の欠落された部分を読まないと、昭君と帝との関係を推測するのが難しいところがある。しかし、少なくとも上述の例は、二人の間に深い情があるというふうに理解できなくもない。中国の文学環境によってそれが普及できなかったが、海を渡って「内侍のかみ」における昭君説話の発想の原点となった、という可能性はないとは言えないと考えられよう。

最後に触れてみたいのは、元代の馬致遠の「漢宮秋」である。昭君説話を扱う元代の戯曲であるが、斬新な設定がいくつかある。まず、絵師に賄賂しない昭君が琵琶によって帝の注意を弾き、明妃に封じられる。帝に罪を問われた絵師が匈奴まで逃げ、單于に美しい昭君の絵を見せる。そして、單于の求婚に自ら和親を申し出る昭君は帝と来世の再会を期し入水してしまい、帝が夢でその魂と再会する。

「明妃」という呼称を初めて真の妃と位置づけ、昭君を美しいままに描くは、中国では「漢宮秋」である。昭君の身分を昇格させることで、元帝の愛する妻さえ守れない軟弱と無能を示し、当時の統治者を風刺するためであると、先行研究がこの創作の意図を解説し、その独創性を指摘している(注7)。また、昭君が自殺する前に帝と来世の約束をし、夢に帝と再会したのも、明らかに同じ時代の楊貴妃説話を扱う白樸の『梧桐雨』から影響を受け、それを意識しての創作なのである。

妃としての昇格も、美しく昭君を描く筋は言うまでもないが、楊貴妃説話と関連すると

ころも、『うつほ物語』における昭君説話と一致している。二つの作品は時代的、空間的、さらに言語的な差があり、直接影響があったとは考えにくく、恐らく偶然であろうと思われるが、共通する先行文献の可能性が考えられる。そうでなくても、同じ文学的構想を、常に中国文学を吸収し取り入れていた日本文人が、中国より二百余年も早く作り上げたこと自体が面白く、文学史・文化史を踏まえてそれを考えるのも、興味深いことなのであろう。

終わりに

昭君説話を中心に、中国と日本におけるそれを整理し、「内侍のかみ」における昭君説話の方法と独創性について分析してみた。また、それが後世の説話に与えた影響を考え、存在可能な先行文献、および元代戯曲「漢宮秋」との関連性にも触れてみた。

初めて昭君説話を物語世界に取り入れ、物語に合わせて創作を加え、そこで出来上がった『うつほ物語』における昭君説話は日本古典における昭君説話の形を作っている。そしてその変容は、やがて昭君説話の発祥地における当説話の発展に殊塗同帰している。中国故事を数多く引用している最初の長編物語である『うつほ物語』、それにおける引用が日本古典に対する影響は言うまでもない。今後は引き続き、当物語における中国故事を研究課題にしたい所存である。

注釈：

1、筆者が整理した限り、相違点は故事の時代、和親の原因、後の数、賄賂をしない原因、描かれる昭君の容貌など。

2、中国文献における昭君説話の相違とそれが生じる原因については、張文徳著『王昭君の傳承故事與嬪變』（學林出版社、2008 年）；張高評『『漢宮秋』本事之變異與創新——從唐宋詩到元雜劇的演化』、『文化遺産』（2011 年 7 月）、日本では川口久雄著『敦煌よりの風・2 敦煌と日本の説話』（明治書院、1999 年）などが研究している。

3、「待詔掖庭」とは、唐の時代では罪を犯した官僚の妻子が住む場所と変わっていたが、漢の時代ではまだ後宮の女性が住む場所であった。

4、『琴操』の編者については、張文徳氏上述の論文を参照。以降、古籍の作者や編者に先行研究が意見をまとまらない場合、張文徳氏の結論を取り、深く触れないとする。

5、木版画「四美图」は現存する最初に昭君の人物像を描く作品であり、昭君出塞を題材にした最初の絵は金代・宮素然の『明妃出塞図』である。その絵は清代に日本に渡り、現在大阪市立美術館所蔵。

6、三上満「宇津保物語・初秋巻の方法」『中古文学論攷』、1984 年 10 月。

7、張文徳著『王昭君の傳承故事與嬪變』、學林出版社、2008 年。

参考本文：

室城秀之校注『うつほ物語 全』、おうふう、1995 年。＊本文末の（）は巻名。

小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』、1994 年

黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』、中華書局、1997 年 5 月。